

管理が可視化された管理社会

岡 本 裕 介

1. はじめに

本稿は、ジル・ドゥルーズの管理社会論をもとに、その後の関連する議論を整理しようとするものである。「管理社会」という用語は単純なので、さまざまな文脈で使われうる。田畑暁生(1999)によると、日本では1960年代に用語が出現し、最初に本格的に論じられたのは1970年に刊行された荒川幾男の『管理社会』である。また、ヨーロッパの系譜は、ファシズムと対決したライヒ、マルクーゼらや、スターリン主義を批判したトロツキー等にさかのぼりうるという。しかし、ドゥルーズの管理社会論とこれらとの関係は不明で、ここではふれない。

第2節ではまず、ドゥルーズの主張を「転調」という独特のキーワードからまとめる。第3節では、関連してしばしば論じられる管理社会の自由について、ドゥルーズのものから、最近の議論までをとおして整理する。第4節では、第3節での整理から得られた中間的な結論について述べ、ここでタイトルにある「管理が可視化された管理社会」にふれる。

2. 「転調」を促す管理社会

ジル・ドゥルーズの管理社会論は、*Pourparlers: 1972-1990*(邦訳『記号と事件——1972-1990年の対話』; Deleuze 1990=2007)に収められた短い文章の

うち、特に「追伸 ― 管理社会について」(邦訳 pp.356-366)がしばしば参照される。この文章は、ミシェル・フーコーに言及しながら、それに独自の見解を加えて管理社会を論じたものである。

規律社会から管理社会へという時間軸がはっきりと明示されている点は、フーコーの所論との相違と言ってもいいかもしれない。「規律」、「管理」という2つの語は、それぞれの社会で権力がどのように働くかを表す。2つの社会は、第2次世界大戦を転換点とし、徐々に後者へと移行していくと言う。

規律社会は、大きな監禁環境を構築し、その中で人々を時間的、空間的に位置づける社会である。そうすることで、社会は単なる総和以上の生産力を得ようとする。社会は人々を特定の鋳型にはめこむことが必要になる。対象となった人はそれぞれの環境の規律を内面化し、その環境の下ではその型にはまったふるまいをすることが期待される。しかし、この仕組みには問題がある。現代社会では、多くの人々が環境を次々に移動していかなければならないという点である。たとえば、家庭→学校→軍隊→工場(そして、人によっては監獄や病院など)というように。規律社会では、それぞれの環境に独自の鋳型があって、移動のたびに人を成型し直さなければならず、非効率になる。このような社会の描写は、少なくとも日本では遠い過去のものではない。学校の教室やオフィスではさまざまな時間的・空間的束縛がある。そこには人間関係における制約も含まれるだろう。また、大学で学んだことを社会で生かせず、勤め先でまた一から必要なことを学び直さなければならない。こうした問題があることは早くから知られていて、マイナーチェンジで乗り切ろうとする動きもあったが、それでは十分に対応できなかった。

管理社会は、この流れの中で生じる。規律社会の「鋳型」に対応する管理社会のキーワードは「転調」(modulation)で、ドゥルーズは転調を「刻⁽¹⁾一刻と変貌を繰り返す自己=変形型の鋳造作業」(Deleuze 1990=2007: 359)と言っている。これは、人々が自発的に自らを変形していく仕組みがある

ということを指している。たとえば、給与という点から見ると、規律社会の工場は、単に生産の水準を最高にしつつ給与の水準を最低におさえる組織体だった。しかし、管理社会における企業は、成員を競合させるなどして恒常的な準安定状態を作り出し、分断して相互敵対させ、自発的に動くことを促す。人が自発的に動くという点は、企業などの1つの環境の外でも同じである。ドゥルーズは学校の外にある生涯教育、病院の外にあるデイケア、在宅医療を管理社会に特有の形態として描く。企業、教育、奉仕活動は準安定状態にあり、同じ転調のなかで共存して、普遍の変形装置のようになっているという (Deleuze 1990=2007: 360)。

ドゥルーズの管理社会論の基本的な主張は、以上に述べたような規律社会の鋳型と管理社会の転調の区別である。他にも述べられていることはあるが、どれもこれらと関連することである。ただし、論考そのものが短く、具体性も十分とは言えない。さまざまな研究者が文脈に応じて議論を補完している。⁽²⁾

3. 管理社会の自由の問題

(1) 可分性と分人

鋳型から転調に変わったことでしばしば論じられるのが、自由の問題である。管理社会では、規律社会のように固定した鋳型に当てはめられることなく、一見して自由に行動できる。しかし、それは一定の制限の中の自由である。ドゥルーズは管理社会の自由が「はじめのうちは新しい自由をもたらしたとはいえ、結局はもっとも冷酷な監禁にも比肩しうる管理のメカニズムに関与してしまったことを忘れてはならない」 (Deleuze 1990=2007: 358) と言っている。

この自由の問題について、ここではまずドゥルーズの言う「可分性」(le individuel) から考えたい。ドゥルーズの管理社会論では、可分性は管理社会における人々の管理の単位である。⁽³⁾ 人間のあり方を指し、個人(individus)

との対で使われることもあるので、この小節の後半でふれる「分人」のような訳語を当てた方がわかりやすいのかもしれないが、ここではこの2つを区別するために、邦訳書にならって「可分性」⁽⁴⁾とする。

規律社会と管理社会の最も基本的な相違点は、前者が人々を集めることで効果を得ようとし、後者はいわば、逆に人間を分割することで効果を得ようとするところにある。ドゥルーズによれば、規律社会の監禁環境の理想は「工場の場合にはっきり見てとれる。それは、集中させ、空間内に配分し、時間のなかに秩序づけることだ。時空間の内部で、その効力が当初の力の総和にまさるような生産力を組織することだ」(Deleuze 1990=2007)。規律社会で学校や工場が人々を監禁する目的は、人々を集めて適切に配置することで、より大きな生産力を得るためである。他方、管理社会に関しては、一転して「分割」が論じられる。規律社会において、管理の単位は分割不可能な個人(individus)であるが、管理社会では可分性(dividuels)になる。

そこで可分性の例として登場するのは、現在ではありふれたものになっているIDカードである。「フェリックス・ガタリが予測していたのは、決められた障壁を解除するエレクトロニクスのカード(可分性)によって、各人が自分のマンションを離れ、自分の住んでいる通りや街区を離れることができるような町である。しかし決まった日や決まった時間帯には、同じカードが拒絶されることもあるのだ」(Deleuze 1990=2007: 364-365)。

現在はIDカードだけでなく、指紋や顔を使って認証することができる。人間を全体としてではなく、一部を切り取って把握し、管理することが、管理社会では行われている。ドゥルーズの管理社会論の範囲で「データ分身」⁽⁵⁾という視点から監視を論じる社会学者もいる(Haggerty and Ericsson 2000)。

さて、この議論で使われている、これ以上分割できない社会の単位である“individus”と否定辞“in-”を取り除いた“dividuel”⁽⁶⁾の対比は、他でも見られるものである。日本では、平野啓一郎の近未来小説『ドーン』に

も「分人」という日本語訳で登場する。ただし「可分性」とは異なる使われ方なので、少し立ち入って比較してみよう。

「分人」という概念の成り立ちは、平野の小説でも説明されている。英語の「個人」(the individual)は不可分であることを含意しているが、この小説の世界(西暦2030年ごろのアメリカ)では、否定辞を除いた“dividual”という語と、その語が示す「個人は分割できる」という考え方が流行している。小説では、英語圏のこの語が日本語で「分人」と訳されている。

『ドーン』の「分人主義」に感銘を受けた読者に依頼されて書かれたという『私とは何か』(平野 2012)に、その考え方の主要な部分がまとめられている。それによると、分人は小説の中だけの思想ではない。むしろ唯一無二の「本当の自分」という考え方の方こそ神話である。私たちは他者との関係ごとにさまざまな顔を見せるが、それはただ1つの「本当の自分」の上に様々な仮面(顔)をつけているということではなく、「本当の自分」は複数あって、それが関係ごとに生じていると考える。「私」はもともと複数あり、したがって分割することができる。分割可能な人格は「分人」と呼ばれている。分割された個々の人格は、小説『ドーン』では“dividual”の最初の音節を取って「ディヴ」と呼ばれていたが、『私とは何か』では、人格のあり方と同様、「分人」になっている。他方、分人は他者との関係においてはむしろ分割不可能であり(平野 2012: 164)、人間を個よりも関係において見るような人間観ということもできる。平野の考え方では、個々のディヴをまとめ上げる統一的な自己はない。人格とは、複数のディヴがリンクしたネットワークである。

ここで分割可能と見なされているのは、「自分」や人格である。平野は、身体は「殺して、バラバラにしない限り、分けることができない」(平野 2012: 4)と言っているのだから、心／身を区別して心の方を指しているということになる。この点で、ドゥルーズの管理社会論とは異なる意味での分割であることがわかる。ドゥルーズの方は二分法によらず、むしろそれを否定する⁽⁷⁾ような形で分割した。

さらに平野は、分人主義について、私たちを不自由から解放する考え方としてとらえている。『ドーン』が刊行された2009年に、平野はテレビ番組に登場し、この考え方を披露している。⁽⁸⁾当時の日本では、雇用情勢の悪化から、路上生活をする30代が増えていた。30代というのは、1990年代の「就職氷河期」のために大学卒業時に正規就職ができなかった年代を含んでいる。彼らは路上生活をする事態になってもなかなか助けを求めようとしない。そのまま餓死する者も出た。平野はその原因を、助けを求めることが自分の全人格を否定することにつながると考えてしまうからだと説明した。そこで、当時書かれたばかりの小説『ドーン』に言及しつつ、それはいわば自分の中の1つの分人(ディヴ)だけの問題であり、第三者のように対処してはどうかと提案している。

また、平野によれば、たとえば専制的な政治権力がそうであるように、私たちをたった1人の「個人」に統合しようとする力がある(平野 2012: 117)。人間が分人の集合体であると統治は難しい。ナチスのドイツやスターリン体制下のソ連では、国家に忠誠を誓う唯一の個人が求められ、秘密警察が、常に人々の分人化、つまり顔を隠したり変装したりして他人になりすますことを監視していた。現代社会で最も注目すべき例は防犯カメラ網で、必ず備わっている顔認識システムは、複数ある分人を顔(という身体の一部)に着目して統合する。

平野は管理社会論には言及していないが、ナチスやスターリン体制で例示されているのが、ドゥルーズの区分で言えば規律社会的な状況であると考えると整合的になる。そこから自由になる方法は、個人を分割することである。変装をして別の人間になりますことは、ここでは心(人格)の分割であると考えられる。その分割を阻害するのは身体の方で、小説『ドーン』でも顔認識システムが分人化のじゃまをする。その一方、顔に特殊な物質を埋め込んで分人ごとの複数の顔をもつ「可塑整形」と呼ばれる技術が登場して分人の活動に貢献する。これに対し、ドゥルーズの言う管理社会の考え方は、分割された人間がある意味で自由を獲得するという点は同

じだが、それは単に1つの監禁環境からの自由に過ぎない。複数の環境を
ととして「転調」する、別のレベルの管理の下にある。

ここまで、人格の分割可能性、つまり多元的自己を論じたものとして平
野啓一郎の「分人」のみを取り上げてきた。しかし、このような自己の在
り方を、現代社会の特徴としてとらえる論者は何人かいて、それを見ると
もう少し多様性があることがわかる。

平野とは違って、多元的自己を否定的に見る論者にジークムント・バウ
マンがいる。バウマンは、「リキッド・モダン」の流動化した状況では、
取り巻く世界が断片化し、個々の生活がまとまりを欠いたエピソードの連
なりに切り分けられていて、個人のアイデンティティも「欠陥のあるジグ
ソーパズル」のようになっているという(Bauman 2001=2007: 83)⁽⁹⁾。日本の文
脈では、岩木秀夫がゆとり教育を論じる中で、「即時充足的・解離的人格」
が、先進諸国でグローバル化とともに進行するポスト産業化、サービス経
済化の産物であると言っている。グローバル化に取り残された「負け組」
の一般大衆は、自分にたまたま与えられた生物的・生理的・心理的個性を
武器にして、そのときそのときの最大限の欲求充足を追求する即時充足的
な生活に追い込まれ、解離的人格を形成する(岩木 2004: 9-10)。つまり、
自己の多元化である。

浅野智彦(2013)は、多元的自己についてのこうした否定的な評価を認め
つつも、流動的な状況でも対応できる柔軟さや、多元的な人間関係をもつ
ことができるといった、生き延びるうえでの利点があると言う。さらに、
多元性をアイデンティティの喪失として理解することに関しても誤りを指
摘している。そもそもエリクソンの意味で統合されたアイデンティティ
は過去にも存在せず、失われたのは、文脈ごとのふるまい方の違いを総体
として見通しうる「場」である。また、多元性は社会への積極的な適応形
態であるとも言う(浅野 2013: 221)。

自己の多元化の背景として論じられている、流動化、ポスト産業化、グ
ローバル化は、いずれも管理社会化と関わりが深いものである。ドゥルー

ズが論じる可分性が機能する社会では、自己を多元的なものとして理解することが促されやすいと考えられる。浅野の表現を借りて言い換えるなら、多元的自己は、管理社会への適応形態でもある。

ドゥルーズ自身は、管理社会がもつメカニズムを「もっとも冷酷な監禁にも比肩しうる」と書き、企業がもつ仕組みを「滑稽きわまりない」と形容していて (Deleuze 1990=2007: 358; 359)、管理社会を否定的に評価しているように見える。ただし、私たちはそのような社会から容易に離脱できるわけではない。管理社会について「恐れたり、期待をもったりしてはならず、闘争のための新しい武器を求めなければならない」 (Deleuze 1990=2007: 358) と書いているように、単に否定して転覆をめざしたりするのではなく、管理社会の下で起きていることを分析して、多様な対処方法を考えるということも必要なのではないだろうか。

(2) 自発性と「やりがいの搾取」

前の小節とは少し視点を変えて、管理社会下での労働の自発性と「やりがいの搾取」に関する鈴木謙介の対比を見てみよう (鈴木 2008)。これは、本稿で取り上げている管理社会論と接続する形で当時繰り返し取り上げられた「アーキテクチャ」論の理解の仕方に関する提案に基づいている。アーキテクチャは、法学者のローレンス・レッシングがあげた、人間をコントロールする4つの手段——法、市場、規範、アーキテクチャ——の1つである (Lessig 2006=2007)。このうちアーキテクチャは、他の3つに比べて被支配者の不自由感が伴いにくい。たとえばコーヒーショップで椅子の堅さによって客の回転率を操作する場合、客はそのことに気づきにくい。客は自己決定しているつもりでも、支配(もしくは干渉)する側から見ると意図通りの支配が実現している。

こうした特徴をもつアーキテクチャは、ドゥルーズの管理社会論と結びつけやすい。⁽¹⁰⁾前節で述べたように、管理社会では、人々が自発的に鋳型を変える(転調する)ようにしなければならない。コンピューターとデータ分

身を使って人々の時空間配置をコントロールするというドゥルーズがあげていた例は、まさにアーキテクチャを使った支配である⁽¹¹⁾。

さて、ここでの鈴木の本主張の1つは、管理社会のアーキテクチャを「技術による人間疎外」と読むのをやめて「情報技術などを用いた環境の設計によって、人々に一定の幅での自己決定を促すことを目指す「仕組み」」（鈴木 2009: 112）と定義することである。つまり、前の小節での区分で言えば、管理社会の肯定的な面をとらえようとする考え方である。

具体的には、本田由紀の「やりがいの搾取」に関する主張（本田 2008）をとらえ直すという内容になっている。本田は、当時登場してきた「自己実現系ワーカホリック」と呼ばれるような、自発的にワーカホリックに陥っていくような事例について、1. 趣味性、2. ゲーム性、3. 奉仕性、4. サークル・カルト性という4つの要因をあげた。このうちサークル・カルト性について「仕事の意味についてハイテンションな、しばしば疑似宗教的な意味づけがなされ、ときには身体的な身ぶりなどをも取り込みながら、高揚した雰囲気の中で、個々の労働者が仕事にのめりこんでいくようなケース」（本田 2008: 91）と定義している。これが安定雇用の保証や高賃金という代価なしに労働力を動員する巧妙な仕組みになっており、したがって、働く側の動機から「自己実現系ワーカホリック」と呼ぶのではなく、雇用する側の動機に合わせて「〈やりがい〉の搾取」と呼ぶのがふさわしいというのが本田の本主張である。

これに対し鈴木は、「やりがいの搾取」には、1. 「やりがい」を提供する環境という水準と、2. 「搾取」という2つの水準があり、これらを区別しなければならないと言う。2は明らかに問題があるが、1に問題があるかどうかは議論で明らかになっていない。また「やりがい」を引き出す環境が巧妙に作られていたとしてもすべての人が一様に洗脳されてしまう仕組みではないという点も指摘する。そこにカルト性やサークル性が介在していたとしても、そのことを自覚しながら参入する者も、反発を覚えながら働く者もいる。また、当時の働かせる側の著述を参照して、「やりが

い」をもたせて働かせたとしても必ずしも高いアウトプットが得られないこと、従業員に定着してもらえるような職場づくりを志向していることといった点を指摘し、正当な言い分があることを論じている。そして、当時の職場において求められているのは、自発性の発露を助けるためのコミュニケーションであると述べる。

すでにふれたように、この議論は管理社会下の自由(自発性)を認め、肯定的に評価するものである。ところで鈴木は、「搾取」をするような「悪玉」を欠いてもこの仕組みは作動するように設計され、推奨されているとして、この対立に関する議論をいったん締めくくったうえで、そのこと自体がこうした悪玉による搾取よりももっと深刻な問題を引き起こすかもしれないと論じている。たとえば、大学進学が可能で成績も上位にあるような人にとっては、いつまでもゴールが見えないことから強迫衝動的な感情が生じること、自己啓発を求められるような場面では、そこから生じる不安の中身を深く検討せず、一時の感情の波としてやり過ごすテクニックが求められ、逆に学校の成績がよくないか、学業への意欲が低いような人は、自己責任論が手放せなくなると推測している。

鈴木は、最後に管理そのものの否定的な面にもふれているが、論述の主眼は肯定的にとらえることである。その際、自発性を促す管理という管理社会そのものの是非と、外部的な問題とを丁寧に切り分けている。ただし、もちろん外部的な問題は、管理にとって取るに足りない問題とは言えない。次にナッジに関する議論を取り上げ、少し違った角度から外部的な問題にふれておきたい。

(3) 自己決定とパターンリズム

前の小節でふれたレッシグは、アーキテクチャについて、個人の自由を規制する「剣」の側面とともに個人の権利・自由を保護する「盾」の側面(暗号技術など)についても言及していた(Lessig 2006=2007: 326)が、総じて前者の方を重視していた。これに対し、後者の可能性に着目して理論化と実

践を試みているのが「ナッジ」(nudge)に関わる諸研究である。行動経済学者のリチャード・セイラーと法学者のキャス・サンステイーンは、個人の選択の環境を構成する「選択アーキテクチャ」の設計を提唱した。なかでも特定の選択肢を排除したり経済的インセンティブを大きく変えたりせずに、当人の利益になるように個人の選択に影響を与えるものを「ナッジ」と定義した。⁽¹²⁾セイラーとサンステイーンがあげるのは、たとえば、学校のカフェテリアで食品の配列を変えるだけで各食品の消費量を最大で25%も変えることができることを利用し、総合的に判断して、生徒たちにとって最善の利益になるように並べるという例である(Thaler and Sunstein 2008: 10-15)。

政策にナッジを活用するという彼らの着想はすぐに各国の政府に採用され、消費者保護や環境問題をはじめ、多くの法制度や公共政策に組み込まれるようになった。アメリカではオバマ政権時代にサンステイーン自身が「社会・行動科学チーム(Social and Behavioral Science Team)」に迎えられ、⁽¹³⁾さまざまな政策にナッジが組み込まれた。日本では2017年に環境省を中心とした「日本版ナッジ・ユニット連絡会議」(環境省 2022)が、2018年には経済産業省による「2050経済社会構造部会」(経済産業省 2021)が設置された。

この文脈で繰り返し取り上げられるアメリカの肥満問題では、⁽¹⁴⁾従来、それは個人の節制の問題で、必ずしも政府が対応するものではないと考えられてきた。しかし、放置するにはあまりにも多くの問題を引き起こした。地方の条例では、加糖炭酸飲料のサイズ規制が行われ、連邦ではオバマ政権時代に重要課題として位置づけられ、学校給食の規制などが行われるようになった。しかし、これもトランプ政権時代に政府が関与すべき問題ではないとして撤廃された。これらは要するに、パターナリズムか自己決定権かという対立である。この2語を融合したような、サンステイーンの「リバタリアン・パターナリズム」は、対立する二者に対する見方を少しずつ変えて両立させ、アジェンダ自体を変更しようとしていると考えられ

る。

ナッジのすべてが管理社会と関係づけられるかどうかはわからないが、管理社会における「転調」を促進するものとして使われうることは確かだろう。それゆえ、この節で論じてきた、自由か否か、自発的か否かといったことはここでも議論になっている。サンスティーンらは当初からこの「リバタリアン・パターナリズム」というフレーズを使って、自らの立場を表してきた。セイラーとサンスティーンが言うには、このフレーズを使うとき、「パターナリズム」を限定して、自由(選択の自由、つまり選択アーキテクチャからのオプトアウト)を維持していることを意味するために「リバタリアン」という語を使っているにすぎない(Thaler and Sunstein 2008: 16)。しかし、ここでの「自由」はどのような意味での自由だろうか。ナッジの場合、被干渉者が不快に感じるくらい自由が制限されることが問題になってくる。

法哲学者的那須耕介によると、ナッジが嫌われる理由はさまざまあるが、ナッジ固有の問題もある。その1つめは、干渉される者が合意や納得のないままにあざむかれ操られる可能性(熟慮的自律性の侵害への懸念)、2つめは、その影響下でとった行動の責任が被干渉者に負わされ、干渉者・設計者側がこれを免れる可能性(任意性の偽装と干渉者の責任転嫁への懸念)である(那須 2020)。後者は、選択アーキテクチャからのオプトアウトがあること自体が問題になっている。強制がなかったことを根拠に、結果についても責任を負わされる可能性があるという問題である。一方、前者は特に非教育的ナッジ、つまり被干渉者の熟慮を回避させたり抑制させたりするタイプのナッジにおいて問題になる。当人の自覚的な決定、熟慮に基づく選択を自律の要件と考えるなら、ナッジが本質的に自立性への脅威を含んでいるように見られてしまう(那須 2020)。とすると、干渉者側の意図とは無関係に、被干渉者のもつ不信がナッジを失敗に導く可能性がある。

これに対し那須は、干渉者が微弱な促しだけで相手の自発的な反応を誘い出そうとするとき、そこには自らの意図よりも社会的協同の実現を優先

しようとしているとし、このような態度をナッジの「内在的美徳」であると言っている。ナッジされた者はこれに反する行動を選ぶかもしれないが、ナッジの挫折はフィードバックを得る機会でもある。その過程を経て、よりしっかりとした協同の可能性がとらえられると言う(那須 2020: 57-58)。

レッシングの解説以来、多くの人がアーキテクチャを、コミュニケーションを介さずに人々を管理する技術と考えてきた。しかし少なくとも、被干渉者の離脱と抵抗の余地を封じ込め、その意図を確実に実現しようとするような、ナッジとは全く相いれないような狭義のアーキテクチャを除けば、むしろアーキテクチャの成否には、それに関するコミュニケーションが重要な場合もある。

さて、最後に本節で論じたことをまとめておく。ドゥルーズの管理社会論でも、同じ射程をもつ後続の議論でも、管理社会は自由や自発性を促す仕組みをもつが、それは管理された自由である。管理社会は自由でもあり不自由でもある。そのどちらをどの程度強調するか、つまり自由をどの程度実質的なものとして評価するかが論者によって異なっている。ナッジに関する最近の議論のなかには、単純に自由・自律性を追求することから後退して、社会的協同を引き出すことを重視するものもある。

4. 管理が可視化された管理社会

前節の最後で扱ったナッジに関する議論は、少なくとも政府が関わるような重要なナッジに限って言えば、可視化されることを前提にしている。干渉する側の意図の透明性がナッジの成否に関わる可能性もある。ドゥルーズが管理社会を論じたとき、そこに現れる「管理」は新しいタイプのものであったためにほとんど意識されなかったかもしれない。また、レッシングのアーキテクチャは、気づかれにくい統治技術と考えられていた。しかし、現在ではそれがある程度可視化されるようになってきた。このように、管理が常に可視化され得る管理社会とはどのような社会だろうか。

管理社会以前に、ナッジは日常生活でもありふれたものと考えることができる。前節でふれた那須は、ナッジの特質が強制・報酬・説得によらない微弱な誘導にあるとすると、政府の規制手段に限ってとらえるのではなく、長い退屈な話を聞かされたときのあくびのように反射的で非意図的なものから、周到に仕組まれた計画的で意図的なものまで、私たちが日常生活で日々行っている相互行為の一様式ととらえる方が自然であると言っている(那須 2020: 62)。ナッジは、特定の個人や組織、機関に独占されるものではなく、むしろつねに重層的で多能的に広がる影響関係のネットワークを形作り、一部は「相互ナッジ」関係にあるだろう。そうすると、他人のナッジに対抗して返す「対抗ナッジ」⁽¹⁵⁾や、他人のナッジに便乗して利益を得ようとする「ナッジ・ハッキング」も生じうる。政府が肥満防止のためのナッジをほどこしても、食品会社が対抗ナッジを講じて高カロリー食品の消費を促すかもしれない。また、那須・橋本・吉良・瑞慶山(2020)では、「ナッジ・リテラシー」の可能性が論じられている。誰もが政府や企業のナッジを分析できるようになるといったことは、とうてい考えられないが、ナッジに関する基礎的な知識を普及させるといったことはあり得るだろう。

ナッジに限定しなければ、複数の干渉者が影響力を戦わせるようなことは実際に頻繁に起きている。ナターシャ・ダウ・シュールがドゥルーズの管理社会論を参照しながらギャンブリング・マシンを論じたように(Dow Schüll 2012=2018)、ゲームはプレイヤーが「自発的に」続けるような工夫が施されている。ギャンブルのように依存症を引き起こしやすいものについては、しばしば政府が規制するという形で対応がなされてきた。より最近になってからも、ビデオ・ゲームに含まれるギャンブル性の強いルートボックスの規制がたびたび話題になった(Kersley 2021)。2020年のアメリカのテック企業の公聴会では、Twitter や Facebook のようなソーシャルメディアの「常習性」も話題になった。つまり、私たちは、日々行政や企業の干渉の中で暮らしている。ただし、単に受動的にその干渉を受けて

いるとは限らない。そこから逃れうるかどうかは別にして、多かれ少なかれ干渉を意識しているだろう。現代は、多元的な干渉の意図の読解を「リテラシー」として要求される社会になっていると思われる。

注

- (1) 以下、外国語文献の日本語訳は、訳本がある場合は主にそれによっているが、適宜変更している場合もある。
- (2) よく知られたものとしては、たとえばデイヴィッド・ライアンの監視社会論 (Lyon 2001=2002)、ナターシャ・ダウ・シュールのギャンブル依存症に関する議論 (Dow Shcüll 2012=2018) などがある。また、注10参照。
- (3) ドゥルーズの“le dividual”は、もともとアンリ・ベルクソンの「物質／持続」という二分法——物質は分割可能だが、持続は分割不可能——に対する批判から来ている。ドゥルーズは分割可能でも不可能でもない、「分割することでその本性を変えるもの」という項を導入してこの二分法を無効化した。
- (4) 内藤慧 (2021) はドゥルーズのいくつかの文献に登場する語 “le dividual” を「分人」として理解することを試みている。
- (5) データ上、個人を分割できるという修辞は、古くからある。プライバシーを論じた法学者のアラン・ウェステインは「データ・シャドウ」という言葉を使っている。ただし、プライバシーは、人を全人的に理解するという意味では、ここで論じている管理社会以前の概念である。
- (6) 個人の分割可能性を “dividual” という語で示すレトリックは、インドやメラネシアを対象とした文化人類学的研究でも使われている (中空・田口 2016)。
- (7) 注3参照。
- (8) 「“助けて”と言えない——いま30代に何が」、『クローズアップ現代』, (NHK 総合, 2009年10月7日放送)。
- (9) これに対し、アンソニー・ギデンズは、現代の自己を、常に再帰的にとらえかえされている物語的なあり方として論じつつも、複数の自己を作り上げる傾向にあるという考え方は明確に否定している (Giddens 1991=2005: 112)。
- (10) ドゥルーズの管理社会論とアーキテクチャを結びつけて論じているのは、哲学者の東浩紀で、管理社会を「環境管理型社会」と呼んでいる (東 2007)。
- (11) アーキテクチャは管理社会にのみ特有の統治技術というわけではない。規律社会では監獄 (パノプティコン)、学校の教室、エネルギー論的機械 (ドゥルーズは、君主制社会を単純な力学的機械に、規律社会をエネルギー論的機

械に、管理社会をサイバネティクスとコンピューターに対応させた；Deleuze 1990=2007: 351) などが統治のためのアーキテクチャと言ってよいだろう。ただし、サイバネティクスとコンピューターは、エネルギー論的機械と比べて、参入の自由度も設計の自由度も非常に高い。管理社会がアーキテクチャに結びつけて論じられやすいのは、そのためだろう。

- (12) 英語の原義は「注意や合図のために人の横腹を特にひじでやさしく押したり、軽く突いたりすること」(Thaler and Sunstein 2008=2009)で、選択アーキテクチャに限定して使用されること以外は、ほぼその通りの意味。
- (13) その後、トランプ政権になって、この仕事は Office of Evaluation Sciences に引き継がれた (Association for Psychological Science 2018)。
- (14) 古くは Sunstein (2005=2015)。ほかに Thaler and Sunstein (2008=2009) など。
- (15) ここでは「相互ナッジ」という文脈の中なので、対抗「ナッジ」だけが論じられているが、ナッジに対抗するのはもちろんナッジだけとは限らないだろう。

参考文献

- 浅野智彦, 2013, 『「若者」とは誰か——アイデンティティの30年』, 河出書房新社。
- Association for Psychological Science, 2018, “The US Office of Evaluation Sciences Releases 2016-2017 Results”, Association for Psychological Science, (2022年 1月31日取得, <https://www.psychologicalscience.org/policy/the-us-office-of-evaluation-sciences-releases-2016-2017-results.html>)。
- 東浩紀, 2007, 「情報自由論」, 『情報環境論集 東浩紀コレクション S₃』, 講談社, 8-205。
- Bauman, Zygmunt, 2001, *Identity*, Cambridge: Polity Press. (=伊藤茂(訳), 2007, 『アイデンティティ』, 日本経済評論社。)
- Dow Schüll, Natasha, 2012, *Addiction by Design; Machine Gambling in Las Vegas*, Princeton: Princeton University Press. (=日暮雅通(訳), 2018, 『デザインされたギャンブル依存症』, 青土社。)
- Deleuze, Gilles, 1983, *Cinéma 1: l'image mouvement*, Paris: Les éditions de minuit. (=財津理・斎藤範(訳), 2008, 『シネマ1 * 運動イメージ』, 法政大学出版局。)
- , 1990, *Pourparlers: 1972-1990*, Paris: Les éditions de minuit. (=宮林寛(訳), 2007, 『記号と事件——1972-1990年の対話』, 河出書房新社。)
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity*, Polity Press. (=秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也(訳), 2005, 『モダニティと自己アイデンティティ——

- 後期近代における自己と社会』, ハーベスト社.)
- Haggerty, Kevin D., and Richard V. Ericson, 2000, "The surveillant assemblage", *British Journal of Sociology*, 51 (4), 605-622.
- 平野啓一郎, 2012, 『私とは何か — 「個人」から「分人」へ』, 講談社.
- 本田由紀, 2008, 『軋む社会 — 教育・仕事・若者の現在』, 双風舎.
- 岩木秀夫, 2004, 『ゆとり教育から個性浪費社会へ』, 筑摩書房.
- 環境省, 2022, 「日本版ナッジ・ユニット (BEST) について」, 環境省, (2022年1月31日取得, <http://www.env.go.jp/earth/ondanka/nudge.html>).
- 経済産業省, 2021, 「2050経済社会構造部会」, 経済産業省, (2022年1月31日取得, https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/2050_keizai/index.html).
- Kersley, Andrew, 2021, 「ゲームの「ガチャ」が規制されても、また新たな“ギャンブル”がやってくる」, (2022年1月31日取得, <https://wired.jp/membership/2021/10/01/article-loot-boxes-new-gambling/>).
- Lessig, Laurence, [2000] 2006, *Code: Version 2.0*, New York: Basic Books. (=山形浩生(訳), 2007, 『CODE VERSION 2.0』, 翔泳社.)
- Lyon, David, 2001, *Surveillance Society: Monitoring Everyday Life*, Buckingham: Open University Press. (=河村一郎(訳), 2002, 『監視社会』, 青土社.)
- 内藤慧, 2021, 「ドゥルーズ哲学は分人主義なのか — le dividual を検討する」, (2021年12月30日取得, https://www.youtube.com/watch?v=F3_6l1vj57U)
- 中空萌・田口陽子, 2016, 「人類学における「分人」概念の展開 — 比較の様式と概念生成の過程をめぐって」, 『文化人類学』, 81 (1): 80-92.
- 那須耕介, 2020, 「ナッジはどうして嫌われる? — ナッジ批判とその乗り越え方」, 那須耕介・橋本努(編著), 『ナッジ!? — 自由でおせっかいなりバタリアン・パターナリズム』, 勁草書房, 45-74.
- 那須耕介・橋本努・吉良貴之・瑞慶山広大, 2020, 『《『ナッジ!?』刊行記念 オンライン・トーク・イベント》 ナッジ! したいですか? されたいですか? — される側の感情, する側の勘定』, 勁草書房.
- Sunstein, Cass R., 2005, *Laws of Fear: Beyond the Precautionary Principle*, Cambridge University Press. (=角松生史・内野美穂(監訳), 神戸大学ELS プログラム(訳), 2015, 『恐怖の法則 — 予防原則を超えて』, 勁草書房.)
- 鈴木謙介, 2009, 「設計される意欲 — 自発性を引き出すアーキテクチャ」, 東浩紀・北田暁大(編), 『思想地図 vol. 3 — 特集・アーキテクチャ』, 日本放送出版協会, 110-135.
- 田畑暁生, 1999, 「管理社会論と情報社会論 — 転換点としての「1984年」」, 『神戸大学発達科学部研究紀要』, 6 (2): 141-152.
- Thaler, Richard and Cass R. Sunstein, 2008, *Nudge: Improving Decisions About*

Health, Wealth, and Happiness, London: Yale University Press. (= 遠藤真美
(訳), 2009, 『実践行動経済学 ― 健康, 富, 幸福への聡明な選択』, 日経
BP 社.)

Westin, Alan F., 1967, *Privacy and Freedom*, New York: Atheneum.